©Heikki Tuuli

Klaus MÄKELÄ

Conductor

指揮 クラウス・マケラ

5/13

まだ20代前半ではあるが、指揮者／チェリストのクラウス・マケラはフィンランド音楽界に大きな影響を与えている。2018／19シーズンから、スウェーデン放送響首席客演指揮者、タピオラ・シンフォニエッタのアーティスト・イン・アソシエーションに就任予定。

これまでにロイヤル・ストックホルム・フィル、ミネソタ管、トゥールーズ・カピトール国立管、カンマーアカデミー・ポツダム、ローザンヌ室内管、エーテボリ響、ヘルシンキ・フィル、フィンランド放送響、タンペレ・フィル、トゥルク・フィルなどを指揮。今回の都響との共演が日本デビューとなる。オペラでは2017年12月に『魔笛』でフィンランド国立歌劇場へデビューを果たした。

シベリウス・アカデミーでヨルマ・パヌラに指揮法を師事、マルコ・ヨロネンらにチェロを学んだ。チェリストとしてはラハティ響やクオピオ響などと共演、音楽祭にも多数参加している。

Still in his early twenties, conductor and cellist Klaus Mäkelä has already made a significant impact on the Finnish musical landscape. From 2018/19 season, he will be Principal Guest Conductor with Swedish Radio Symphony and Artist in Association with Tapiola Sinfonietta. Mäkelä has performed with orchestras including Royal Stockholm Philharmonic, Minnesota Orchestra, Orchestre National du Capitole de Toulouse, Gothenburg Symphony, Helsinki Philharmonic, and Finnish Radio Symphony. In opera, he made his debut in December 2017 with performances of *Die Zauberflöte* at Finnish National Opera.

P Promenade

プロムナードコンサートNo.377

Promenade Concert No.377

サントリーホール

2018年5月13日(日) 14:00開演

Sun. 13 May 2018, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● クラウス・マケラ Klaus MÄKELÄ, Conductor

ピアノ ● ルーカス・ヴォンドラチェク Lukáš VONDRÁČEK, Piano

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

シベリウス：レンミンカイネンの帰郷 op.22-4 (7分)

Sibelius: Lemminkäinen's Return, op.22-4

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第4番 ト長調 op.58 (35分)

Beethoven: Piano Concerto No.4 in G major, op.58

Ⅰ Allegro moderato
Ⅱ Andante con moto
Ⅲ Rondo: Vivace

休憩 / Intermission (20 分)

シベリウス：交響曲第1番 ホ短調 op.39 (38分)

Sibelius: Symphony No.1 in E minor, op.39

Ⅰ Andante, ma non troppo - Allegro energico
Ⅱ Andante (ma non troppo lento)
Ⅲ Scherzo: Allegro
Ⅳ Finale (quasi una Fantasia): Andante - Allegro molto

主催： 公益財団法人東京都交響楽団
後援： 東京都、東京都教育委員会
助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待)協賛企業・団体はP.63、募集はP.66をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

©Irene Kim

Piano

Lukáš VONDRÁČEK

ピアノ

ルーカス・ヴォンドラチェク

カトヴィツェ音楽アカデミー、ウィーン音楽院、ニューイングランド音楽院（ボストン）で学ぶ。2002年に15歳でアシュケナージ指揮チェコ・フィルとオーケストラ・デビューを果たす。2016年エリザベート王妃国際コンクールで優勝。これまでにP.ヤルヴィ、ノセダ、ネゼ=セガン、エッシェンバッハ、インキネン、V.ペトレンコ、フルシャ、ウルバンスキ、ドゥネーヴらの指揮で、フィラデルフィア管、サンクトペテルブルク・フィル、フィルハーモニア管、ボルティモア響、オスロ・フィル、ネーデルラント・フィルなどと共演。ウィーン・コンツェルトハウス、ハンブルク・エルプフィルハーモニー、コンセルトヘボウ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスなどでリサイタルを行っている。

Lukáš Vondráček studied at Academy of Music in Katowice, Vienna Conservatoire, and Boston's New England Conservatory. He won the 1st prize of Queen Elisabeth Competition in 2016. Vondráček has performed with orchestras including Philadelphia Orchestra, St. Petersburg Philharmonic, Philharmonia Orchestra, Baltimore Symphony, Oslo Philharmonic, and Netherlands Philharmonic under batons of P. Järvi, Noseda, Nézet-Séguin, Eschenbach, Inkinen, V. Petrenko, Hrůša, Urbański, and Denève.

シベリウス：
レンミンカイネンの帰郷 op.22-4

フィンランドの大作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）は若い頃から民族的題材による作品を手掛けている。その霊感の源泉はフィンランドの壮大な伝承叙事詩『カレヴァラ』で、彼はこの叙事詩に民族精神の本質を見出していた。1892年完成の声楽付きの交響的作品《クレルヴォ》はその最初の大きな結実だが、引き続いて彼は1893年に『カレヴァラ』によるオペラを企画する。しかし構想を進めるにつれて自分がオペラに不向きであることを痛感することになり、書き始めていたオペラの前奏曲を交響詩に変更して1893年に完成させた。これが有名な「トゥオネラの白鳥」である。

そして２年後の1895年、さらに『カレヴァラ』の中に出てくる向こう見ずの英雄レンミンカイネンの物語による３つの交響詩を作曲し、これらに「トゥオネラの白鳥」を加えて４作からなる連作交響詩とした。すなわち「レンミンカイネンとサーリの乙女」「トゥオネラのレンミンカイネン」「トゥオネラの白鳥」「レンミンカイネンの帰郷」からなるいわゆる《４つの伝説》（別名《レンミンカイネン組曲》）である（曲順についてシベリウスは晩年に第２曲と第３曲を入れ替えた）。全体の構成や各曲間の動機の緻密な関連など、壮大な交響曲のような纏（まと）まりを持つ連作だが、出版が個別になされたこともあって、４曲一緒に演奏される機会は多くない。

本日演奏されるのは４曲中最後に置かれた「レンミンカイネンの帰郷」。レンミンカイネンは、北の国ポホヨラの娘の愛を得るためにトゥオネラ川の白鳥を射るという課題を与えられるが、待ち伏せしていた仇に殺され、黄泉の国トゥオネラに運ばれて身体をばらばらにされる。レンミンカイネンの母親は、特製の熊手で切断された息子の遺体をかき集め、神への祈りと特別の薬で息子を蘇生させる。こうして生き返ったレンミンカイネンが故郷へ向かう情景を音化したのがこの交響詩である。作曲は1895年だが、97年に大幅に改訂され、1900年にも手直しされている。

曲はアレグロ・コン・フオーコ（ポーコ・ア・ポーコ・ピウ・エネルジコ）。この“熱っぽいアレグロで（少しずつ勢いを増して）”という表記にこの曲の性格が示されていよう。すなわち、情熱に満ちた前進的動きで進み、その中で勢いをさらに高めて輝かしい終結に至る曲で、初期の作だけにロマン的な傾向を残しつつも、旋律的な主題をあまり用いず、音型的な動きのうちに断片的な細かい動機を点滅させていく点に、後年のシベリウスに連なる手法がみられる。

（寺西基之）

作曲年代：1895年　改訂／1897年、1900年
初　　演：1896年４月13日　ヘルシンキ　作曲者指揮
楽器編成：ピッコロ２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、大太鼓、シンバル、弦楽５部

ベートーヴェン：
ピアノ協奏曲第4番 ト長調 op.58

この協奏曲は1803年頃からスケッチがなされ、1805年から翌年にかけて作曲されたもので、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）の中期の“傑作の森”と呼ばれる作品群中の1曲である。この協奏曲の作曲中には、1804年の交響曲第３番《英雄》やピアノ・ソナタ《ワルトシュタイン》、1805年のピアノ・ソナタ《熱情》、1806年のヴァイオリン協奏曲や３曲セットの弦楽四重奏曲《ラズモフスキー》などの大作が次々と生み出される一方で、交響曲第５番《運命》や第６番《田園》のスケッチや作曲も進められていた。ベートーヴェンはこれらの創作を通して、1曲ごとに従来の古典的な様式を超えた新しい表現を開拓している。

このピアノ協奏曲第４番も、従来の協奏曲にはない新しい試み――例えば第1楽章がいきなり独奏ピアノで開始される点や第２楽章と終楽章を連続させている点など――が随所に窺われる意欲作である。全体にリリカルな性格を持っている点は、前作の劇的緊張に満ちたピアノ協奏曲第３番とは対照的だ。

非公開の初演は1807年３月にウィーンのロプコヴィッツ侯爵邸で行われたと考えられている。また1808年12月22日ウィーンで、交響曲第５番や第６番の初演とともに彼自身の独奏で演奏されたという記録が残されているが、それ以前にすでに公開初演がなされていたかは明らかではない。

第1楽章　アレグロ・モデラート　ト長調　協奏風ソナタ形式をとっているが、管弦楽提示部の冒頭にまずピアノが第１主題を示す点が新機軸である。全体の流動的ともいえる調的な扱いも大胆で、それによって独特の叙情的な色合いが生み出されている。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート　ホ短調　通常の歌謡的な緩徐楽章とは趣が異なり、鋭い付点リズムを特徴とする叙唱風の劇的な弦合奏と瞑想的なピアノとが交互に対話風に現れるという、意味ありげな間奏曲風の音楽で、短いながらも緊張感に満ちている。そのまま次の楽章に続く。

第3楽章　ロンド／ヴィヴァーチェ　ト長調　行進曲風の主題によって晴れやかな展開が繰り広げられていくロンド・フィナーレである。

（寺西基之）

作曲年代：1805～06年
初　　演：私的初演／1807年３月　ウィーン　ロプコヴィッツ侯爵邸
公開初演／1808年12月22日　ウィーン　アン・デア・ウィーン劇場
いずれも作曲者独奏
楽器編成：フルート、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部、独奏ピアノ

シベリウス：
交響曲第1番 ホ短調 op.39

ジャン・シベリウス（1865～1957）は若い時から、声楽入りのカンタータ風の大作《クレルヴォ》、組曲《カレリア》、《4つの伝説》（《レンミンカイネン》組曲）など、母国フィンランドの民族的題材に基づく標題的な管弦楽作品を世に出し、国民的な芸術家としての名声を確立する。そうした民族主義的な創作活動ゆえに1897年には政府からの年金を受けるまでになった彼は、1898年4月ベルリンにおいて交響曲第1番に着手した。これは彼にとっては（少なくとも表立っては）標題となる題材に基づかない純粋な交響曲への初めての挑戦という点で大きな意味を持っていた。

もともと若い時期のシベリウスは大の酒好きであるとともに、浪費癖も相当なものだった。その傾向は、国民的芸術家としての地位を確立してから一層、期待が大きなプレッシャーとなって、拍車がかかっていたようだ。その彼が交響曲第1番に取り組むにあたって、集中して仕事に励むべく禁酒を決意したことは、彼が初めての交響曲の創作をいかに重視していたかを窺わせるものだろう。

結局はこの禁酒の誓いが守られたのはほんの1ヵ月ほどに過ぎなかったが、ベルリンで書き始められた交響曲第1番は、帰国後にロヨ、ヘルシンキ、ケラヴァなどフィンランドの各地で少しずつ書き進められ、1899年初めに完成をみることとなる。シベリウスが最初の交響曲を作曲するにあたって特に範としたのは、チャイコフスキーの交響曲だった。絶対音楽としての伝統的な純交響曲の形を取りながらもそこに標題的要素を感じさせる民族表現を強烈に打ち出したチャイコフスキーの交響曲のあり方が、シベリウスのこの作品に発展的に受け継がれていることは明らかで、交響曲第1番は、彼がそれまでに民族的な標題作品で示してきた特質に通じるような交響詩的性格を持つものとなっている。

特にこの頃は、フィンランドを支配していたロシアの弾圧が強化され、フィンランドの自治が奪われていった時期だった。そうした中、交響曲第1番に引き続いて書かれたのが有名な交響詩《フィンランディア》で、そこでは愛国主義的な抵抗精神が烈しく表現されているが、同じ精神は交響曲第1番にもはっきり感じられるといえよう。

初演は1899年4月26日、ヘルシンキで開催されたシベリウスの自作演奏会において、彼自身の指揮によって行われ、大成功を収めたが、翌年彼は曲に改訂を施して決定稿を作っている。

第1楽章　アンダンテ、マ・ノン・トロッポ～アレグロ・エネルジコ　ティンパニの弱いトレモロの上にクラリネットが物悲しいモノローグを綴る短くも印象的な序奏（2

分の2拍子）に始まる。ソナタ形式の主部は4分の6拍子、第2ヴァイオリンの刻みの上に第1ヴァイオリンが雄大な自然を感じさせる主題を示し、ヴィオラとチェロがただちにそれを追って模倣する。この主題がボロディンの交響曲第1番の第1楽章の主題と酷似していることはしばしば指摘されているところだが、楽章全体は激しい起伏のうちにいかにも北欧の自然を感じさせるような、ほの暗く幻想的な雰囲気に満ちた発展を見せていく。最後に劇的な盛り上がりを示した後、2つのピッツィカートの和音で閉じられる。

第2楽章　アンダンテ（マ・ノン・トロッポ・レント）　変ホ長調　2分の2拍子
静謐かつ明澄な美しさを持った主題で始まる緩徐楽章。3つの主題を中心としたラプソディックな展開のうちに次第に音楽は厳しさと激しさを加えて、劇的なクライマックスを築く。フィンランドの厳しい状況がそこに映し出されているのだろうか。最後は再び穏やかな気分に戻る。

第3楽章　スケルツォ／アレグロ　ハ長調　4分の3拍子　土俗的な野趣味に富んだ力強いスケルツォで、ティンパニの活躍が際立っている。途中のカノン風の対位法的な動きも目立つ。対照的にトリオ（レント〔マ・ノン・トロッポ〕）は牧歌風。

第4楽章　フィナーレ（クワジ・ウナ・ファンタジア）／アンダンテ～アレグロ・モルト
“クワジ・ウナ・ファンタジア（幻想曲風に）”という表記どおり、幻想的な交響詩を思わせるフィナーレ。序奏は2分の2拍子で、第1楽章序奏のモノローグの旋律がここでは弦によって何か切実に訴えかけるように悲劇的に示される。主部は4分の2拍子、落ち着きのない第1主題が暗く激しい高まりを示した後、平和への憧れを込めた大らかな第2主題（アンダンテ・アッサイ、4分の4拍子）がヴァイオリンのG線で歌われる。

その後激しい闘争が繰り広げられ、劇的な盛り上がりを作るが、やがて勝利を宣言するかのように第2主題が高らかに再現される。しかし曲は勝利では終わらない。現実を思い起こすように再び悲劇的な気分が立ち込め、最後は第1楽章の終結と同様、2つのピッツィカートの和音でもって曲は断ち切られる。

（寺西基之）

作曲年代：1898～99年
初　　演：1899年4月26日　ヘルシンキ　作曲者指揮
楽器編成：フルート2（第1・第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、ハープ、弦楽5部

©Naoya Yamaguchi (Studio Diva)

SHIMONO Tatsuya

Conductor

指揮

下野竜也

5/22

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室で学ぶ。1996年イタリア・シエナのキジアーナ音楽院でオーケストラ指揮のディプロマを取得。1997年大阪フィル初代指揮研究員。1999年文化庁派遣芸術家在外研修員に選ばれ、ウィーン国立音楽演劇大学に留学。2000年東京国際音楽コンクール〈指揮〉優勝と齋藤秀雄賞受賞、2001年ブザンソン国際指揮者コンクールの優勝で一躍脚光を浴びる。

国内の主要オーケストラに定期的に招かれる一方、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、チェコ・フィル、シュトゥットガルト放送響（SWR響）、シリコンバレー響をはじめとした国際舞台での活躍が目覚ましい。

2006年に読響初代正指揮者、2013年4月から2017年3月まで同団首席客演指揮者。その間、2011年に広島ウインドオーケストラ音楽監督、2014年に京響常任客演指揮者へ就任。さらに2017年4月から同団常任首席客演指揮者、広響音楽総監督に就任。京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻教授。

以前からコリリアーノの作品をいくつも指揮しており、作曲者からの信頼も厚い。

Born in Kagoshima in 1969, Tatsuya Shimono cemented his international reputation as a conductor by winning the 1st Prize at the 47th Besançon International Competition in 2001. Since then he has guest conducted major orchestras in Japan and abroad such as Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia, Czech Philharmonic, Stuttgart Radio Symphony (SWR Symphonieorchester), Symphony Silicon Valley and NHK Symphony, among others. Currently, Shimono holds the titles of General Music Director of Hiroshima Symphony, Principal Guest Conductor of Kyoto Symphony, and Music Director of Hiroshima Wind Orchestra.

B Series

第855回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.855 B Series

サントリーホール

2018年5月22日(火) 19:00開演

Tue. 22 May 2018, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 下野竜也 SHIMONO Tatsuya, Conductor

ソプラノ ● ヒラ・プリットマン * Hila PLITMANN, Soprano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

メンデルスゾーン：交響曲第3番 イ短調 op.56 《スコットランド》 (38分)

Mendelssohn: Symphony No.3 in A minor, op.56, "Scottish"

Ⅰ Andante con moto - Allegro un poco agitato
Ⅱ Vivace non troppo
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro vivacissimo - Allegro maestoso assai

休憩 / Intermission (20 分)

コリリアーノ：ミスター・タンブリンマン ーボブ・ディランの7つの詩 (2003)*(日本初演) (37分)

Corigliano: Mr. Tambourine Man - Seven Poems of Bob Dylan (2003) (Japan Premiere)

Ⅰ	Prelude: Mr. Tambourine Man	前奏曲：ミスター・タンブリンマン
Ⅱ	Clothes Line	物干し
Ⅲ	Blowin' in the Wind	風に吹かれて
Ⅳ	Masters of War	戦争の親玉
Ⅴ	All Along The Watchtower	見張塔からずっと
Ⅵ	Chimes of Freedom	自由の鐘
Ⅶ	Postlude: Forever Young	後奏曲：いつまでも若く

【コリリアーノ80歳記念】

音響協力：宮沢正光（有限会社ふぉるく）

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：明治安田生命

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁
公益財団法人朝日新聞文化財団

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Soprano

Hila PLITMANN

ソプラノ

ヒラ・プリットマン

グラミー賞受賞歌手、ソングライター、女優。エルサレムに生まれ、ジュリアード音楽院で音楽学士と音楽修士を得た。彼女は驚くべき音楽の才能、軽快で美しい声、チャレンジングな新作を演奏する能力で世界的に知られている。これまでにスラットキン、サロネン、マズアらの指揮でロサンゼルス・フィル、ニューヨーク・フィル、ロンドン響などと共演。

『ダ・ヴィンチ・コード』サウンドトラック（グラミー賞ノミネート／Decca）、『コリリアーノ：ミスター・タンブリンマン』（グラミー賞受賞／Naxos）、『ダニエルプール：トワード・ア・シーズン・オブ・ピース』（Naxos）など卓越した録音に参加。またデル・トレディチ《ダム・ディー・トゥイードル》、フランク・ザッパ《200モーテルズ》、カーニス《2つの目覚めと２組の子守歌》など数多くの世界初演にソリストとして登場している。

Grammy Award-Winning Singer, Songwriter & Actress. Born in Jerusalem, Hila Plitmann studied at Juilliard School. She has performed with orchestras such as Los Angeles Philharmonic, New York Philharmonic, and London Symphony. Plitmann has accumulated an impressive catalogue of recordings, including Grammy nominated soundtrack for *The Da Vinci Code*, Corigliano's *Mr. Tambourine Man* (for which she won a Grammy), and Danielpour's *Toward A Season of Peace*. She has appeared as a soloist in numerous world premieres, including Del Tredici's *Dum Dee Tweedle*, Frank Zappa's *200 Motels*, and Kernis's *Two Awakenings and a Double Lullaby*.

メンデルスゾーン：
交響曲第3番 イ短調 op.56《スコットランド》

ヤーコプ・ルートヴィヒ・フェーリクス・メンデルスゾーン＝バルトルディ（1809～47）は、ドイツ、ハンブルク生まれの音楽家（従来はフェリックスという米語風が多かったが、近年ではドイツ語読みのフェーリクスと表記されることが増えてきている）。

メンデルスゾーンは現存しているだけで、全部で5つの交響曲を書いた（ここでは初期の「弦楽のための交響曲」については触れない）。それらを作曲順に並べてみれば一目瞭然だが、《スコットランド》と通称されるこの交響曲は、「第3番」とされつつも、最後に完成されたものである。

（完成）	（出版）	
1824年	1831年	第1番
1830年	1868年	第5番《宗教改革》
1833年	1851年	第4番《イタリア》
1840年	1841年	第2番《讃歌》
1843年	1843年	第3番《スコットランド》

ナンバリング（上記は旧全集による）は、作曲順でなく出版順に付けられたものであり、両者が一致しないことは当時としては珍しいことではない。さらに、メンデルスゾーンには改訂癖があったので、最終的な完成という基準をどこに設定するかもやや複雑である。この《スコットランド》交響曲も初演から出版までの間に改訂が施されている（従って本稿では「完成」を出版年と同じとし、初演はそれに先立つ第1稿によるものを掲載している）。

そもそもの作曲は1829年に遡る。その年、ベルリンで《マタイ受難曲》の蘇演を果たした20歳のメンデルスゾーンは、同年4～12月の間、初めて親元を離れ、音楽家としての教養を身につけるためにスコットランド、ウェールズ、イングランドへと旅立った。その際に訪れたスコットランドでの印象が音楽として結晶化したのがこの作品。第1楽章冒頭の旋律はメアリー女王が住んだホリルード宮殿の廃墟を訪れた際（1829年7月30日）に思いついたものだという。

しかし、その後《宗教改革》を書くことになったため、《スコットランド》作曲は中断。1830～31年にローマに滞在した折にも作曲のチャンスは訪れたが、これは《イタリア》に姿を変える。1838～40年には《讃歌》と続き、それが完成した1841年夏、ようやく《スコットランド》に集中し、翌年1月に書き上げることができた。初演はその直後の3月にライプツィヒで行われ、ヴィクトリア女王に献呈された。総譜とパート譜の出版は1843年3月1日、ブライトコプ社（ライプツィヒ）から。改訂を含めると、決定稿となるまでに実に14年を要したことになる。

全４楽章から成り、各楽章はアタッカ（切れ目なし）で続けるよう作曲者は指示を遺している。以下の各楽章のテンポ表示は改訂後のものだが、初演時は現行とやや異なっていた。

第1楽章　アンダンテ・コン・モート～アレグロ・ウン・ポーコ・アジタート　イ短調、４分の３拍子の63小節にわたる長大な序奏で始まる。古（いにしえ）を想うかのような哀感の滲む音楽で、先述した1829年のスコットランド旅行時にスケッチされたのはこの部分のことを指す。アレグロからが主部。ソナタ形式、８分の６拍子で同じくイ短調をとる。第１主題は第１ヴァイオリンに置かれ、クラリネットが被せられている。第２主題はホ短調でクラリネットから。提示部が過ぎると、“嵐のシーン”と呼ばれる展開部に入る。再現部、コーダを経て、最後に短く序奏が再現される。

第2楽章　ヴィヴァーチェ・ノン・トロッポ　４分の２拍子、ヘ長調。ソナタ形式にロンドが組み合わされたスケルツォ楽章。短い前奏と後奏が付くのが特徴のひとつである。クラリネットの明るい旋律が主要主題。《真夏の夜の夢》で聴かれるような軽やかな弦楽器の走句が印象的だ。第２主題は、第１ヴァイオリンが *pp* で聴かせる８分音符での下降音型。バグパイプの雰囲気や、スコットランド民謡的な味わいを織り込んでいると評される楽章である。

第3楽章　アダージョ　４分の２拍子、イ長調の緩徐楽章。当楽章も前奏と後奏、さらに間奏が付く（間奏を展開部とするソナタ形式と見ることも可能）。第１ヴァイオリンが歌うリートのような部分（第１主題）と、クラリネット、ファゴット、ホルンで始められる同音反復を基調とする行進曲風な部分（第２主題）から成り、間奏（展開部）を挿んで後、それらは変奏しつつ再現される。再現部の少し前から、実に23小節にわたり、チェロのたっぷりとした歌が聴かれる。また、この部分には第３ホルンが単独でずっと寄り添っているので、そちらも是非注目してほしい（75～97小節）。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァチッシモ～アレグロ・マエストーソ・アッサイ　２分の２拍子、イ短調。第２楽章と同じく、ソナタ形式にロンドが組み合わされている。第１主題は、開始後すぐにヴァイオリンが奏す、跳躍が特徴的な音型。第２主題は、編成がぐっと小さくなった中、第１ヴァイオリンがひそやかにH（ロ）音を刻む上をオーボエが吹く旋律である。展開部ではフガートが用いられ、音楽の緊密度が高められているのも巧みである。珍しいのはコーダが２つの部分から成ること。前半はクラリネットがモノローグのように静かに歌い始める直前から。その後、フェルマータを挿むと、アレグロ・マエストーソ・アッサイに転ずる。95小節もの長さを持つこのイ長調のコーダ後半によって全曲は輝かしく壮大にまとめられる。

（松本 學）

作曲年代：1829～42年　改訂／1843年
初　　演：1842年３月３日　ライプツィヒ　作曲者指揮　ゲヴァントハウス管弦楽団
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、ティンパニ、弦楽５部

コリリアーノ：
ミスター・タンブリンマン－ボブ・ディランの7つの詩

2008年グラミー賞受賞作品
（クラシック現代作品部門、ベスト・クラシカル・ヴォーカル・パフォーマンス部門）

シルヴィア・マクネアーからカーネギー・ホールで歌う大きな連作歌曲を作曲してほしいと依頼された時、彼女が私に提示した希望はただ一つ、アメリカのテクストを使ってほしい、ということだった。

成人後の私の作品で、テクストを扱った詩人は4人だけである。スティーブン・スペンダー、リチャード・ウィルバー、ディラン・トーマス（私のオラトリオ《ディラン・トーマスの詩による3部作》は彼の傑作に基づいている）、そしてウィリアム・M・ホフマンである。ウィリアムとのコラボレーションは数々あるが、オペラ『ヴェルサイユの幽霊』が筆頭にあげられる。今回も彼に新しいテクストを創作してもらうほか、私にはアイデアが浮かばなかった。

ただし、ボブ・ディランというフォーク・シンガー／ソングライターの評判が非常に高いことはいつも聞いていた。だが私は自分のオーケストラの書法を磨くことに懸命で、世界中がディランの歌を聞いていたころ、私は彼の曲をまったく聞いたことがなかった。

そこで彼の詩集を買ってみた。すると多くの詩に、私の知るどの詩にも引けをとることのない、美しく、すぐに心に響く言葉が並んでいるのがわかった。そして驚いたことに、私自身の音楽言語との相性がぴったりだと感じた。すぐに私はボブ・ディランのマネージャーのジェフ・ローゼンにコンタクトを取り、ディランの詩を私の音楽に使用したいという考えを伝えた。

未だかつて、そのような試みがなされたという例はなかったので（それも私にとっては大きな魅力だった）、私はディランの作品のアレンジをしたり、変奏曲を作ったり、原曲を借用するのではないということ、そして自分の連作歌曲を完成させるまではディランの原曲を聞かないと決めていることをマネージャーに説明した。シューマンやブラームスやヴォルフたちが、ゲーテの同一の詩を自分たちの音楽スタイルの中で再解釈したのと同じように、私はディランの詩を私が受け止めるままに扱いたいと思った。ポップスやロックを書くことに挑戦するつもりもない。ポピュラー・アートとの強い結びつきのある詩を取り上げ、それを言うなれば反対方向の、クロスオーバーによるコンサート芸術へと差し向けたいと思ったのだ。ディランは許可をくれて、私は作品に取りかかった。

35分の連作歌曲のために、私は7つの詩を選んだ。空想的で華麗なプロローグ「**ミスター・タンブリンマン**」に続いて、5つの鋭敏で内省的なモノローグが作品の中

心部分を形成する。そしてエピローグの「**いつまでも若く**」は一種のフォーク・ソング的ベネディクトゥス（祝祷）であり、これが作品を締めくくる。5つの歌は、感情の成熟、市民が成熟していく旅をドラマティックに辿る。無邪気な「**物干し**」に始まり、広い世界があることに気づき始め（「**風に吹かれて**」）、「**戦争の親玉**」では政治に対する怒りを覚え、この世の終わりを予感し（「**見張塔からずっと**」）、思想の勝利というヴィジョンに到達する（「**自由の鐘**」）。音楽的には、5つの歌それぞれが伴奏的なモティーフを提示し、それが次の曲の主要モティーフとなる。「物干し」の下行音階は「風に吹かれて」のパッサカリアとして浮かび上がる。「風に吹かれて」の脈打つような音型は、「戦争の親玉」で打ち鳴らされるオスティナートとして引き継がれる。「戦争の親玉」の終わりに爆発的に現れる切迫した和音は、「見張塔からずっと」の騒がしい伴奏へと繋がる。そして「見張塔からずっと」で反復する音型は、「自由の鐘」の鐘の音へと溶けていく。

声楽とピアノによる版を作曲してから数年後、私はこの作品をオーケストレーションした。（ディランのテクストだけに）ソプラノは“オペラティック”に歌ってほしくはない。そのため増幅（amplified）することを明確に記した。アンプを用いることで、ソプラノはオーケストラに重ねて発声しながらも、親密な声音を維持することができる。作品はマーク・アダモに捧げられている。

（ジョン・コリリアーノ／飯田有抄訳）

作曲年代：ピアノ版／2000年
オーケストラ版へ改訂／2003年

初　　演：ピアノ版／2000年３月15日　ニューヨーク
シルヴィア・マクネアー（ソプラノ）マーティン・カッツ（ピアノ）
オーケストラ版／2003年10月23日　ミネアポリス
ヒラ・プリットマン（ソプラノ）
ロバート・スパーノ指揮　ミネソタ管弦楽団

楽器編成：フルート３（第２・第３はピッコロ持替）、オーボエ３（第３はイングリッシュホルン持替）、クラリネット３（第３は小クラリネット／バスクラリネット持替）、ファゴット３（第３はコントラファゴット持替）、アルトサクソフォン（バリトンサクソフォン持替）、ホルン４、トランペット４、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、ヴィブラフォン、シロフォン、グロッケンシュピール、チャイム、フレクサトーン、タムタム、メタルプレート、サスペンデッドシンバル、トライアングル、ハンマー、ポリスホイッスル、タンブリン、ヴィブラスラップ、スラップスティック、小太鼓、テナードラム、大太鼓、テンプルブロック、ウッドブロック、ハープ、ピアノ、弦楽５部、独唱ソプラノ（アンプ使用）

ジョン・コリリアーノ (John Corigliano)

©J. Henry Fair

1938年ニューヨーク生まれ。現代音楽において、最も豊かで、個性的で、幅広い作風による作品を世に送り続けているアメリカの作曲家。代表作は、打楽器と弦楽のための《奇術師》、ヴァイオリン協奏曲《レッド・ヴァイオリン》、交響曲第３番《サーカス・マキシマス》、交響曲第２番、交響曲第１番、オペラ『ヴェルサイユの幽霊』など。ジュリアード音楽院作曲科で教え、ニューヨーク市立大学レーマン・カレッジで特別教授を務めている。

KOIZUMI Kazuhiro

Honorary Conductor for Life

終身名誉指揮者
小泉 和裕

5/28

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。これまでにベルリン・フィル、ウィーン・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、フランス放送フィル、ロイヤル・フィル、シカゴ響、ボストン響、モントリオール響などへ客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者などを歴任。

現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks, Orchestre philharmonique de Radio France, Chicago Symphony, Boston Symphony and Orchestre symphonique de Montréal, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.

A Series

第856回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.856 A Series

東京文化会館

2018年5月28日(月) 19:00開演

Mon. 28 May 2018, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor
ヴァイオリン ● アレクサンドラ・スム Alexandra SOUMM, Violin
コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ドヴォルザーク：序曲《謝肉祭》op.92 B.169 (9分)

Dvořák: “Carnival” Overture, op.92 B.169

グラズノフ：ヴァイオリン協奏曲 イ短調 op.82 (20分)

Glazunov: Violin Concerto in A minor, op.82

休憩 / Intermission (20 分)

ドヴォルザーク：交響曲第7番 二短調 op.70 B.141 (38分)

Dvořák: Symphony No.7 in D minor, op.70 B.141

Ⅰ Allegro maestoso
Ⅱ Poco Adagio
Ⅲ Scherzo: Vivace
Ⅳ Finale: Allegro

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
助成： 文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会 文化庁

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

©Béatrice Cruveiller

Violin

Alexandra SOUMM

ヴァイオリン

アレクサンドラ・スム

モスクワ生まれ。5歳よりヴァイオリンを学び、その後ウィーンでボリス・クシュニールに師事。2004年若手音楽家のためのユーロヴィジョン・コンクール第1位。現在はパリを拠点にし、国際的な活躍を展開。これまでに、パリ管、ロンドン・フィル、BBCフィル、イスラエル・フィル、ベルリン・ドイツ響、ロサンゼルス・フィルなどと、ブロムシュテット、N.ヤルヴィ、ソヒエフ、スラットキンらの指揮者と共演。シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、メクレンブルク=フォアポンメルンなどの音楽祭にも登場している。長年にわたりスイス・小澤征爾国際アカデミーに参加し、小澤征爾より厚い信頼を得る。Clavesレーベルより2枚のアルバムをリリース。

Born in Moscow, Alexandra Soumm later moved to Wien to study with renowned pedagogue Boris Kuschnir and won the Eurovision Competition in 2004. Curentlly, she based in Paris. Soumm has performed with orchestras such as Orchestre de Paris, London Philharmonic, BBC Philharmonic, Israel Philharmonic, Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, and Los Angeles Philharmonic under batons of Blomstedt, N.Järvi, Sokhiev, and Slatkin. Her festival appearances include Schleswig-Holstein and Mecklenburg-Vorpommern, among others.

ドヴォルザーク：
序曲《謝肉祭》op. 92 B.169

50歳を過ぎ既に国際的な名声を確立していたアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、よく知られているように、新設の音楽院の院長に就任するため1892年の秋にアメリカへ渡ったが、その直前に3つの序曲を作曲した。それは演奏会用序曲《自然と人生と愛》と題され、3部作としての一体的な構想のもとに書かれたものだった。だが最終的には3曲が独立した作品として出版され、それぞれ《自然のなかで》《謝肉祭》《オセロ》というタイトルを与えられた。

つまり《謝肉祭》は、当初の作曲者の構想に従えば、この3部作の第2番、あるいは第2部ということになる。もっとも今日では、《自然のなかで》や《オセロ》が演奏されることはあまりなく、この《謝肉祭》のみが圧倒的に親しまれているようだ。ただこれはこの3曲に共通していることだが、いかにも標題音楽的なタイトルを付けられているものの、例えばリストの交響詩のごとく、特定のストーリーや情景を描写したものではなく、あくまで全体的なイメージをゆるやかに喚起するために使用されていると思われる。

さて序曲《謝肉祭》は、アレグロ、イ長調、2分の2拍子、自由なソナタ形式。熱狂的とも言える華々しさを持つ第1主題で開始され、一瞬にして聴き手を謝肉祭の賑わいや興奮の中へ投げ込んでくれる。第2主題も高揚した気分を引き継いだまま堂々と奏される。その後ヴァイオリンにはメランコリックな美しい副次的旋律も歌われる。

拍子が変わり音楽が落ち着くと、イングリッシュホルン、フルート、オーボエ、クラリネット、ヴァイオリンの各ソロによる室内楽的で静かな部分となる。ここでクラリネットが奏する旋律は、3部作の横申的素材とでも言うべきものであり、その他のソロで聴かれるものは、そこから派生したと考えられる。しかしその静けさは長く続かず、音楽は最初の拍子とテンポに戻り、活気と緊張を増していく。やや自由な形式ではあるが、ここが提示部と展開部の境界と考えられる。

展開部は第1主題と第2主題によって念入りに書き込まれ、高潮の頂点で再現部に突入する。ここで聴かれるのはほとんどが第1主題であり、あの副次的な美しい旋律はもちろん、第2主題すらリズムの断片しか登場しない。そして極めてリズミックで精力的な音楽が続き、速度を上げてコーダに達し終結する。

全体にこの作曲家としては異例なほど打楽器の活用が華々しく、金管楽器やハープの効果的な使用も顕著である。

（石原立教）

作曲年代：1891年
初　　演：（3部作全曲）1892年4月28日　プラハ
作曲者指揮　プラハ国民劇場管弦楽団
楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、シンバル、ハープ、弦楽5部

グラズノフ：ヴァイオリン協奏曲 イ短調 op.82

アレクサンドル・グラズノフ（1865～1936）は「力強い仲間（ロシア五人組）」やチャイコフスキー（1840～93）などの流れをうけついだ作曲家で、ソ連時代となってからはレニングラード音楽院の教授に就任した。この時の教え子にはショスタコーヴィチ（1906～75）がいる。

グラズノフは8つの交響曲（第9番は未完）や、《ライモンダ》《四季》を含む3つのバレエ音楽、4つの協奏曲、7つの弦楽四重奏曲などを残している。この中で今日もっともよく演奏されるのは、このヴァイオリン協奏曲、そして《ライモンダ》（1898年初演）である。いくつかの交響曲は最近、日本でも実演が増えた。

このヴァイオリン協奏曲は1904年にサンクトペテルブルクで創作され、翌年にサンクトペテルブルク音楽院大ホールで初演された。このときヴァイオリン・ソロを担当したのは大ヴァイオリニストのレオポルド・アウアー（1845～1930）、指揮は作曲者自身。作品はアウアーに献呈されている。

全体は続けて演奏され、表面上は単一楽章のようになっている。日本ではこれまで一般に、2楽章構成の曲と見ることが多く、以前に発行されていた古い楽譜（ヴァイオリン／ピアノ版）は実際にそのように印刷区分されていた。またこれを引きずる形で、CDなどでは自由に（時にかなり誤って）トラック処理されているものが多かった。しかしそもそもこの曲のオリジナル版権を所有しているベリャエフ版のスコアには楽章区分がなく、作曲者は単一楽章の曲と考えていたように見える。さすがに近年の楽曲分析や海外の文献では、曲全体を単一楽章構成と見なすものが大半になってきた。ヴァイオリニスト側も、そのように考えて演奏する人がわりあい普通のようである。

曲の前半は**モデラート**で始まる3部形式（アンダンテの中間部をもつ）。全曲の中間地点（前記ベリャエフ版では、全66ページ中の32～33ページ）にはカデンツァ（作曲者自作。多くのヴァイオリニストはこれをそのまま演奏する）があり、ここがブリッジとなる。

そして後半（**アレグロ**）はロシアの民族色を濃厚に打ち出したフィナーレと見なすことができる。ここはトランペット2本が8小節の勇壮な主題を導いて開始され

る。このフィナーレ部分に来ると、ソロはハーモニクス（倍音の原理を利用した弦楽器の高音）や左手のピツィカートなどを駆使した各種動機を次々に繰り出して野性味を盛り上げる。

なおコーダの直前に、ソロがグロッケンシュピールとハープ、フルートに合わせて16小節にわたって重音のピツィカートを奏する有名な個所がある〔楽譜には“ギターのように（quasi guitarra）”とある〕。実はこれは、ギターというより、ロシアの民族楽器バラライカの模倣であるといわれる。実演の場合は視覚的にも大変おもしろい部分だが、音量的にはソロとトゥッティとのバランスが難しい。

（渡辺和彦）

作曲年代：1904年（完成）
初　　演：1905年3月4日(ロシア旧暦２月19日)　サンクトペテルブルク
レオポルド・アウアー（ヴァイオリン）　作曲者指揮
楽器編成：フルート３（第３はピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、ハープ、弦楽５部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク：交響曲第7番 ニ短調 op.70 B.141

アントニン・ドヴォルザーク（1841 ～ 1904）はベドルジヒ・スメタナ（1824 ～ 84）とともに、チェコ（ボヘミア）の民族楽派の代表的作曲家である。しかし先輩のスメタナがオペラや交響詩など標題音楽のジャンルを中心に民族主義的な音楽のあり方を求めていったのに対して、ドヴォルザークは幅広いジャンルを手掛けている点が特徴的だ。中でもとりわけドヴォルザークが力をいれたのは、交響曲や室内楽曲など古典様式のジャンルであった。

実際彼は、19世紀後半の大作曲家の中でもドイツのヨハネス･ブラームス（1833 ～ 97）とともに、伝統様式をとりわけ重視した作曲家であり、それは交響曲を９曲、弦楽四重奏曲に至っては14曲（断章的なものを除く）も残していることに表れていよう。こうした伝統ジャンルの中にボヘミアの民族的要素を盛り込むことで、彼は自らの国民的様式を発展させていったのである。

初期の交響曲では、伝統的な交響曲様式のうちにリストやワーグナーらの革新的な音楽の影響も窺わせつつ、そこに民族的な色合いを浮かび上がらせるような作風を試みた彼は、中期の交響曲では旋律やリズムに民謡や民俗舞曲の語法をよりはっきりした形で取り入れることで民族主義的な色彩を前面に打ち出した。だが後期交響曲の第１作と位置付けられる本日の第７番ではさらに彼の新しい境地が示されている。

この第７番は1884年にロンドンを訪れ好評を博したドヴォルザークが、次のロ

ンドン訪問のための交響曲として書いたものとされるが、尊敬する親友ブラームスの交響曲第３番を聴いて感銘を受けたことも作曲の大きな動機だった。実際、渋いロマン的性格のうちに豊かな感情を湛えたその内容と堅固な論理構成の中の綿密な展開法はブラームスを想起させよう。

だからといって民族的性格が後退しているわけでは全くない。これが書かれた頃、ドヴォルザークは外国でも広く認められる一方で、当時の民族主義運動の盛り上がりに共感して愛国心をさらに高め、民族的な闘争の中で音楽家は何をなすべきかを真剣に考えていた。交響曲第７番はそうした激しい民族的な主張を、それ以前の交響曲のように直截に民俗的楽想を用いるのではなく、より内面化された形で表現しているのである。

すなわち、ロマン的な交響曲様式と民族表現とが内的に融合されているのであり、全体を支配する暗い情感と内に秘めた情熱から生まれるロマン的な民族感情や、民族主義的な抵抗精神を感じさせる悲劇的なドラマ性は、ドヴォルザークの他の交響曲にはない特徴である。この少し前の1883年に書かれた管弦楽のための愛国的な序曲《フス教徒》に連なる特質が、この第７番では円熟期の確かな筆遣いと音楽的深みのもとに表し出されている。作曲は1884年末から1885年３月にかけてなされ、初演は1885年４月22日にロンドンにてドヴォルザーク自身の指揮で行われて大成功を収めた。

第1楽章　アレグロ・マエストーソ　ニ短調　暗くうごめくような第１主題に始まるソナタ形式。第２主題は憧憬的な気分を持つが、全体は悲劇的な色彩が強く、作曲者自身の内面感情と民族的な情熱が交錯する。

第2楽章　ポーコ・アダージョ　ヘ長調　叙情的な穏やかさが支配的だが、その中にも痛切な感情を滲ませた美しい緩徐楽章である。

第3楽章　スケルツォ／ヴィヴァーチェ　ニ短調　ボヘミアの民俗舞曲フリアントの特徴を持ったスケルツォ楽章。

第4楽章　フィナーレ／アレグロ　ニ短調　ドラマティックな展開で運ばれる闘争的なソナタ形式のフィナーレで、ブラームスの交響曲第３番のフィナーレの影響が窺える。最後は明るいニ長調のうちに結ばれる。

（寺西基之）

作曲年代：1884～85年
初　　演：1885年４月22日　ロンドン　作曲者指揮
楽器編成：フルート２（第２はピッコロ持替）、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦楽５部